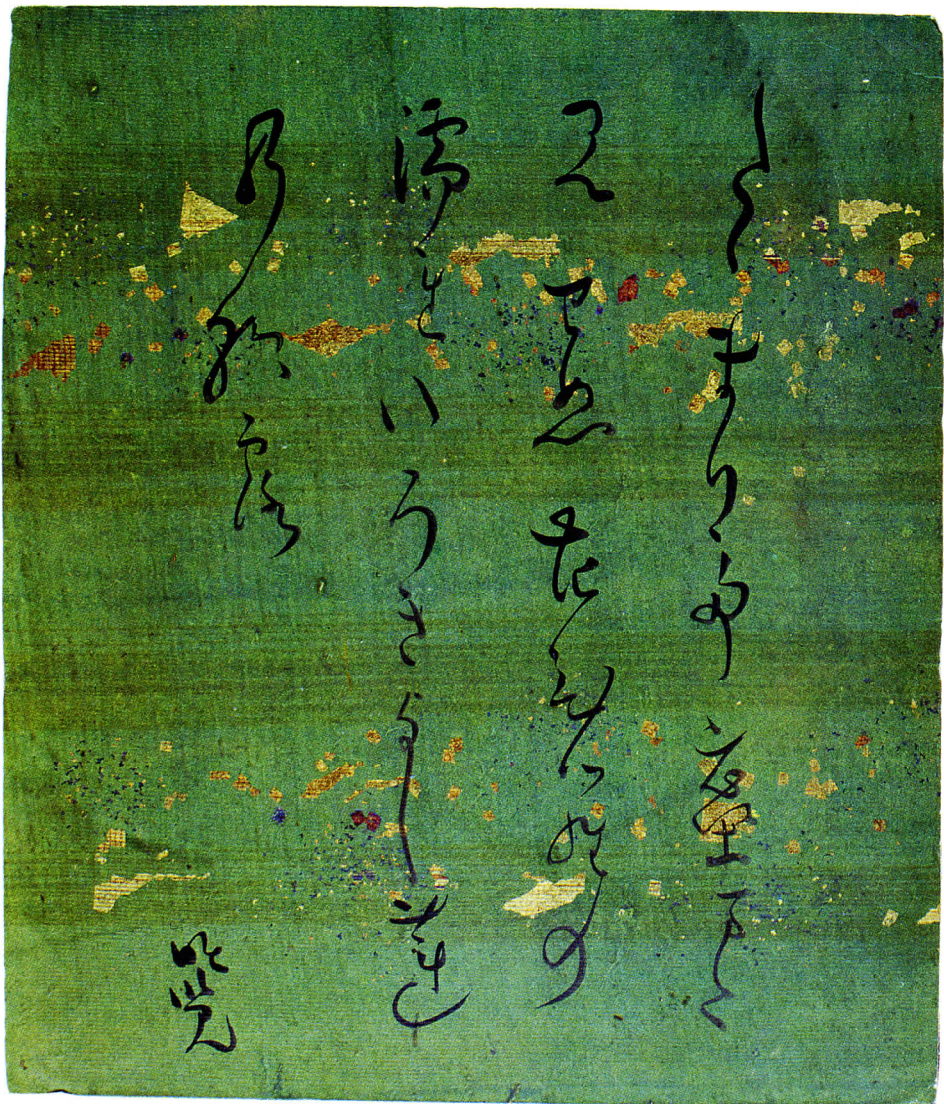

ふくいミュージアム

1986. 3. 1

No. 9

福井県立博物館



橘 曙 覧 色 紙

「たゝまりて 薬まだ見せぬ 花びらの濡れいろきよし 蓮の朝露」

〔小出家資料〕

博物館 61年度の特別展

○春季特別展

日本海のおいたち

—化石が語る1億年—

期間

昭和61年4月26日～6月5日

日本海は福井県の気候に影響を与えるとともに、私たちに豊かな恵みをもたらしてきました。また古代においては大陸文化との交流の“道”としての役割も果し、“日本海”は福井県の歴史・文化に密接にかかわってきたと言えます。

この“日本海”はいつごろ誕生し、どのような経過をたどって現在に至ったのでしょうか。そこで、この“日本海のおいたち”を探ってみようというのが今回の特別展の主なテーマです。この特別展の主な展示内容と展示資料を順を追って紹介しますと…。

I 日本の恐竜と手取の湖

日本海が形成される以前の約1億年前、今の日本列島はアジア大陸の一部でした。そこはシダやソテツのなまかななどの植物が生い繁る森林でした。潟や湖が広がり恐竜たちも岸辺を歩いていたにちがいありません。ここでは、日本で今までに発見された恐竜の化石を一堂に展示します。

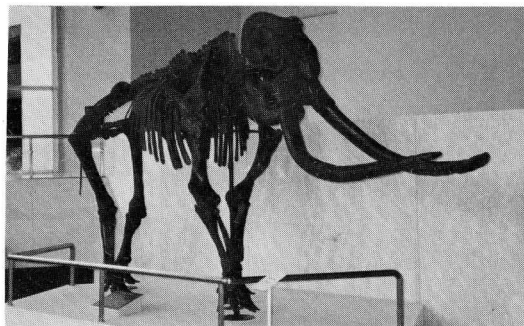
〈主な展示資料〉

日本の恐竜化石（モシリユウ、サンチュウリュウ、ミフネリュウなど）植物化石など。

II 日本海のはじまり

約3000万年～2000万年前、激しい火山活動がありそれによって淡水の湖が広がりました。やがて南や北の方から海が進入し、日本海のはじまりとなりました。

〈主な展示資料〉 淡水魚やトンボの化石、3つの気候型を示す植物の化石など。



ナウマン象模型（岐阜県立博物館）

III 日本海トロピカル時代

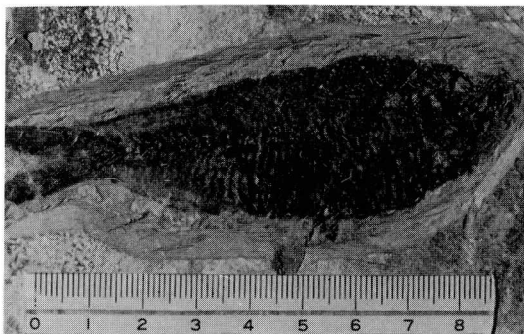
約1500万年前、日本海は最も広がり、このころの日本列島は“多島海”のようになり、そして暖流が南から流れこみ、日本海はトロピカル時代を迎えたのです。

〈主な展示資料〉 朝鮮半島をはじめとして、山口・広島・岡山・島根・鳥取・福井・石川・富山各県で発見されたビカリヤを中心とする貝化石。

IV 陸と海のセキツイ動物たち

日本海のトロピカル時代に生きていたセキツイ動物の化石を展示します。ここでは、これまで未公表だった化石も数多く展示します。

〈主な展示資料〉 ペンギン様の鳥類、ウミガメ、ゾウ、サイ、スッポン、バク、イルカ、セイウチ、クジラ、パレオパラドキシア、サメ、デスモスチルスの化石や鳥類の化石など。



ニシン科の魚の化石

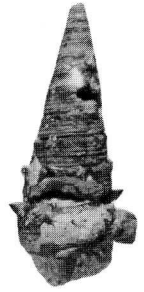
（島根県国府町産・兵庫県円尾氏蔵）

V いまにつながる日本海 一過去100万年一

約100万年前、日本海はほぼ現在のような姿に近づいてきましたが、なお変遷を続けました。氷河時代の海進海退を経て、日本列島はやがて朝鮮半島から離れていきました。そして、やがて我々の生活の場となっていき、また、日本海は我々の祖先に多くの恵みを与えてくれるのです。

〈主な展示資料〉ナウマン象化石、越前海岸沖の玄達瀬の岩石や貝化石など。

以上のような展開で構成し、本県で初公開の資料を含め、他県より広く関連資料を集め、「日本海のおいたち」をわかりやすく展示しようと思います。



ピカリヤ

○ 秋季特別展

古鏡展 (仮称)

期間

昭和61年10月～11月頃

61年度秋の特別展は、古来、姿を映す道具としてあるいは権力の象徴として、また時には信仰の対象として、人間の生活・文化に常に深く関わってきた「鏡」をとり上げます。

わが国では、弥生時代から古墳時代にかけて、主に墳墓などに副葬品として鏡が埋納されました。それは、部族の長あるいは更に大きい部族のまとまりの長などが葬られる際、彼の権威を象徴する一つの宝器として所持されたものが多かったようです。姿を映し、太陽の光をまばゆいばかりに反射する鏡は、その科学的原理が明らかにされない時代にあってはきわめて神秘性に満ちた存在で、その後の古代・中世以降も、時として、祭儀に用いられる道具であったり、霊威の宿るものとしてそのものが信仰の対象であったりしました。中国からもたらされた鏡やそれを模して日本で作られた鏡の背面に鋳出された神像や獣などの複雑な文様の有様からも、そういった性格の一端をうかがい知ることができます。また、古代末から中世にかけてしばしば見られる、仏像を鏡面に線刻した「鏡像」や、浮彫りにした「懸仏」なども、その一例と言えます。

一方、貴族文化の高揚を見た奈良・平安時代の頃には、鏡は化粧の必需品としてもかなり普及していたようで、鏡背の文様も、工芸品の一分野として様々な文様意匠が施されるようになります。平安時代

中頃までは、中国唐の影響を強く受けた鏡が数多く作られますが、遣唐使の廃止に伴う、いわゆる国風文化の波を受けると、鏡の文様も和様化の道をたどります。平安時代後期の鏡ともなると、花・鳥・流水などをモチーフとした優れて繊細な美の世界が展開します。

今回の展観では、以上のような鏡の用途や文様の移り変わりをまず概観することから始め、鏡に関わる文化史の流れを眺めていただければと思います。

次に、文様が和様化した段階の「和鏡」に特にスポットをあて、松・菊・梅・山吹・水草・鶴・雀などの文様一つ一つを系統的に展示していきます。とり上げるのは、平安時代後期以降、末法の世に、56億7千万年後の弥勒菩薩下生の時まで法華経などの大切な経典を地下に埋めて守り伝えるという思想により流行したところの「経塚」から出土する数多くの和鏡が中心となります。王朝貴族、あるいは地方の貴族・僧侶などが現世利益・極楽往生等を願って造営した経塚には、おそらく悪霊を退けるという意味で、鏡が埋納されましたが、それらは、経塚そのものの理解のみならず、この時期の鏡文様の展開のあり方といった工芸史的側面、更には鏡作り職人や工房といった社会史的側面などを探っていく上でもきわめて有効な資料です。

地域的には、北陸・畿内を中心として全国的に関連資料を集成し、展示することによって、上のような面での北陸もしくは福井の地域性をも浮彫りにしていきたいと考えます。

そして、何にもまして、貴族たちがこよなく愛好した鏡の情趣あふれた花鳥の美の世界にたたずんではるか遠い王朝の昔の文化の香りを満喫していただければと思います。

研究ノート

白山周辺の虚空蔵菩薩像の像容について

はじめに

今立町大滝は古くから越前和紙の生産地として著名であるが、また中世以降白山を祀り、近世末には四十八坊を数えたという大寺であった大滝寺の所在地としても知られている。



この旧大滝寺の一堂 図1

であったと考えられる神宮堂には、本尊として虚空蔵菩薩像が安置されている(図1)(現在は東京国立博物館に寄託中)。この像は像高49.3cm、左手に宝珠、右手に剣を執り、結跏趺坐する姿で、後補の両手先を除いて完全な桧の一木造りである。本像についてはすでに西川新次氏によって、『今立町誌』や『越前国府周辺の平安仏像』展図録などで紹介されているが、それによると、「その端正な趣きや充実した体軀」から9世紀後半の中央作であろうといわれる。このように本像は現在まで嶺北で知られている仏像のうちで最も古作であり、かつその作品の優秀さも含めて極めて注目される像である。ここでは本像の像容について若干の問題を提起したい。

I

大滝寺が白山を奉じていたことは前述したが、白山信仰圏および周辺には虚空蔵菩薩が散見される。まずもと白山中居神社に本地仏として安置されていたという、石徹白大師堂の重要文化



図2

財銅造虚空蔵菩薩像(図2)。また同じく岐阜県には虚空蔵信仰で名高い高賀山があり、その山麓の高賀六社の一つ、新宮神社の遺品も一括して重要文化財に指定され

ているが、その本尊銅造虚空蔵菩薩像は(図3)貞和二年(1346)に造立されている。さらに石川県では石動山が虚空蔵信仰の山として名高い(図4)。



図3

さてこのようにみえてくると、白山周辺の虚空蔵菩薩像が、冠をかぶり、左に宝珠・右に剣を持し、結跏趺坐するという同じ像容を示すことに気づく。すなわちそれらは同様な信仰基盤あるいは内容を有するのではなかろうか。



図4

II

現在のところ、白山周辺の虚空蔵信仰に関して最も論じられているのは、美濃・高賀山信仰であるが、大方は懸仏の遺品や記録から鎌倉時代に高賀山の本地が虚空蔵菩薩に比定されたと認められている。ただ問題は、その虚空蔵信仰の移入先はどこかということによって説が分かれているようである。まず一つは伊勢・朝熊山金剛証寺の虚空蔵求聞持法を修する真言僧徒が持ちこみ、白山をへて石動山に伝播したという説。一つは近江・金勝寺の虚空蔵信仰が美濃・赤坂明星輪寺を経て持ちこまれたという説。一つはもともと白山の別山は虚空蔵信仰の山で、高賀山は白山を拝していたという、三説になるようである。

さてそこで東京国立博物館の所蔵する朝熊山権現の本地虚空蔵菩薩像をみると(図5)、月輪中の蓮華座に坐し、筋光明を放ち、五仏宝冠をかむり、左手は宝珠をのせた蓮華をとり、右手は与願印を示す。これは後に述べる求聞持虚空蔵の本尊の姿であるが、ともかく高賀山の本尊とは異なる。また、近江・金勝寺の虚空蔵菩薩像は(図6)、左手は掌を上にして五指をひろげ、右手は第一・三指を曲げて蓮茎をとるような形とし、左足をはずし、右足を踏みおろして坐す。即ちこれも高賀山と異なる。従って白山周辺

の虚空蔵信仰の典拠は白山信仰の内に存していたものか、あるいは別の方面から移されたと考えた方がよいのではなからうか。

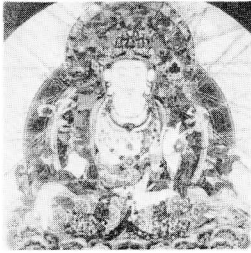


図5

III

そこで、左手に宝珠・右手に剣、結跏趺坐という姿を念頭におきつつ、その所依の經典にあたっ



図6

みると、まず北涼・曇無讖訳『大方等大集經』虚空蔵品とその異訳である唐・不空訳『大集大虚空蔵菩薩所問經』では姿の記載は見当らない。ついで桃秦・仏陀耶舎訳『虚空蔵菩薩經』では、「宝蓮華上に結跏趺坐」とされ、その「頂上如意宝珠」があるとしている。この「如意宝珠」は虚空蔵菩薩が娑婆世界に現われたときに出現するのであるが、同本異訳の失訳『仏説虚空蔵菩薩神呪經』、劉宋・曇摩密多訳『虚空蔵菩薩神呪經』では「如意宝珠」が最初から登場するようになり、虚空蔵菩薩とは異なる働きをする。「観虚空蔵法」という悔過法の經典である劉宋・曇摩密多訳『観虚空蔵經』になって、菩薩は頭の上だけでなく、手に如意宝珠をとることになる。また隋・闍那崛多訳『虚空孕菩薩經』になって如意宝珠が「摩尼宝」と呼ばれる。このように虚空蔵菩薩は如意宝珠への信仰がより顕著になってきたといってもよからうが、密教になると、唐・金剛智訳『金剛頂瑜伽中略出念誦經』第一の金剛蔵灌頂のように虚空蔵菩薩がいても金剛摩尼が大きな意味をもつようになる。それはともかく不空訳『大虚空蔵菩薩念誦法』は「虚空蔵法」の經典であるが、金剛頂系でありその本尊は金剛界四印会金剛宝菩薩、即ち左手で宝珠、右手与願印を示す像であり、先述の求聞持虚空蔵の所依經典、唐・善無畏訳『虚空蔵菩薩能滿所願最勝心陀羅尼經』も金剛頂系であり、五仏宝冠

をつけ、左手に如意宝珠をのせた蓮華、右手与願印という姿を示す。

IV

それでは剣をもつ虚空蔵菩薩はというと、『現図曼荼羅』虚空蔵院主尊(図7)と円珍請来の『胎蔵旧図様』の虚空蔵菩薩(図8)があげられる。特に『旧図様』の像はまさしく左手宝珠・右手剣をとる姿を示すが、石田尚豊氏の『曼荼羅の研究』によると、両者とも所依の經典が見当たらないとされ、また種々の図像集には、「胎蔵虚空像」として『現図曼荼羅』像は記載されるが、『旧図様』像はみられず、どれほど、流布していたかは不明といわざるをえない。



図7



図8

ふり返って、白山周辺の虚空蔵信仰をみると、石動山ではその縁起に「求聞持」法の名がみえ、また越前・平泉寺系の『白山権現講式』の虚空蔵にも「求聞持本尊」とみえる。即ち、剣と宝珠を持して、かつ求聞持本尊たる虚空蔵菩薩像が行なわれていたわけである。この二つを結びつける可能性があるものとして「法輪虚空蔵」を呈示したい。

「法輪虚空蔵」は京都・嵯峨野法輪寺の本尊で、法輪寺は空海の弟子道昌の創建。『白宝口抄』には法輪虚空蔵として、「左持如意宝、右執宝剣」と宝珠と剣をとることをいうが、『覚禅鈔』の求聞持法では、「又道昌僧都、依法輪虚空蔵加持力、得自然智、位登僧都」とその像で求聞持を修したとする。ただ問題は同じ『覚禅鈔』で「法輪胎蔵同之」とあり、法輪虚空蔵は胎蔵虚空蔵と同じ、即ち左手には如意宝珠をのせた蓮華を持つということで、『白宝口抄』とは異なることである。ともあれ、剣を持し、かつ求聞持の本尊となるのは「法輪虚空蔵」だけのように思われる。

(長坂)

収蔵資料の紹介

ききやく 鰭脚類化石（複製）

この標本は、現在福井市明倫中教諭の竹山憲市氏が昭和58年に高浜町の中新世の地層（約1500万年前）から発見・採集したもので、氏の研究によって新属新種のアシカ超科の化石鰭脚類として報告された。

鰭脚類で現生のものはアシカ科・セイウチ科・アザラシ科の3科がある。この標本はセイウチ科の直



接の先祖に近いものと考えられている。

この標本は新属・新種の標本として貴重であるだけでなく、この標本と一緒に採集された貝化石から判断して、熱帯地域に生息していたと考えられている。しかし、現在鰭脚類は冷温域に生息しているため、1500万年前には熱帯地域に生息していたものが、しだいに生息域が北方に移動していったことを示すものとして注目されている。（東）

学名：*Prototaria primigena* Takeyama and Ozawa

時代：新生代新第三紀中新世

産地：福井県高浜町

保管場所：兵庫教育大学地学教室

文献：TAKEYAMA and OZAWA, 1984: A New

Miocene Otarioid Seal from Japan.

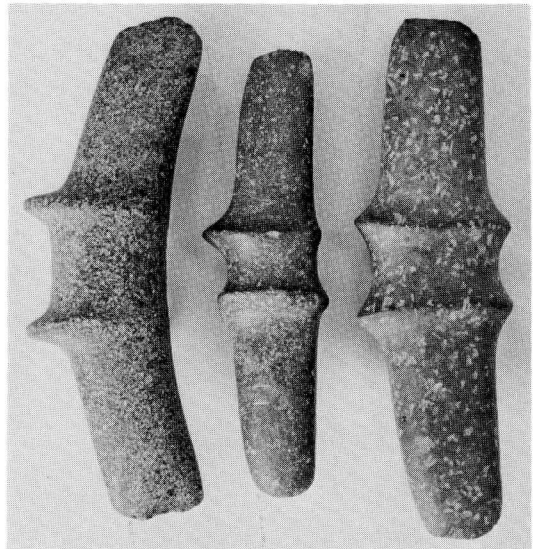
Proc. Japan Acad., 60, Ser. B, 36-39.

（昭和60年度複製品作製）春季特別展で展示

どっ こ いし 独 鈷 石

これらは、縄文時代の後～晩期に用いられた磨製石器で、一種の両頭石斧である。両端には両刃の石斧のように刃があり、中央部2ヶ所に節状の突出部がならんで作られている。その形が仏具の独鈷を連想させるところから独鈷石とか石鈷とかよばれてきた。しかし、おそらく中央部を柄の先につけて使用したものであろう。全体が多少わん曲したものが多いのも柄を付けて使用するのに適した工夫であろう。典型的な形の独鈷石はみな東日本の出土品で西日本には例をみないという。それらの中には、実用的でないものもあり、祭祀などに利用されたものもあるようである。

県内出土で磨製の立派な独鈷石は写真の3点があるのみである。左から順に安竹遺跡（福井市）、大味中遺跡（坂井町）、丸山遺跡（福井市）の出土品。いずれも安山岩製であり、左のものほどそりが強くなっている。左端のものは、全長18.9cm、重さ462g



である。越前の平野部での発見が多く、若狭ではいまだ発見されていない。そのころ越前が、東日本文化の影響を受けていたことを示す一つの資料である。

（青木）

郷土の人物シリーズ④

—福井生糸の先覚者 坪田孫助—

元治元年(1864)、越前産生糸がはじめて横浜港から海を渡った。日米修好通商条約が結ばれてからわずか6年後のことである。その生糸を外国商館に持ち込んだ人物こそ、今立町粟田部の商人坪田孫助(当時28才)であった。

彼は天保7年(1836)、粟田部の貧しい農家に生まれた。17才のときから村の生糸商に勤め、生糸の取り扱いをすっかり習得し、26才で結婚すると独立して生糸仲買商を始めることになる。そのころの生糸の商いといえば、大野、勝山、今庄、粟田部方面の地糸を買い入れ、各城下で売りさばくことであった。しかし、天性の商才から先を見通した彼は、それだけでは飽き足らず、諸外国を相手とする通商貿易に夢を抱いていたのである。

福井一の生糸商小川屋の協力もあって最初の貿易に成功した彼は、福井藩にその腕を見込まれ、慶応3年(1867)藩保有の生糸全部の売込に向かい、見

事その期待にこたえた。

こうして何度も横浜へ足を運ぶうち、彼は、外人の好みに応じるためには越前産生糸の品質改善が急務であることを悟り、積極的に製糸器械・技術の導入に力を尽くした。明治19年(1886)には自らも製糸会社を設立し模範を示すなどのかいあって、越前生糸の品質は向上、均質化し、内外で定評を得ることになった。

同じころ桐生、足利地方の羽二重生産は、海外需要が増大し、とても注文に応じきれなくなっていた。福井では当時、奉書紬、洋傘地、ハンカチーフなどの絹織物がつくられていたが、羽二重の製織方法は知られていなかった。しかし、横浜で羽二重輸出の好況を知った彼は、福井の機業家にその有利さを説いてまわった。これをきっかけとして、明治20年(1887)県は桐生の技術者高力直寛を招き羽二重の製織法を伝習させることになった。ここから羽二重王国福井の輝かしい歴史が始まることになる。

坪田孫助、彼は福井生糸の先覚者であり、同時に福井羽二重の大恩人である。彼の残した功績の大きさははかり知れない。(田中)

——ピテオライブラリーから——

越前海岸の海女たち

磯には豊かな生物資源があります。企業的な漁業を営むことこそできませんが、大規模な漁具を使わないでもさまざまな貝や魚、海藻を取ることができます。それだけに、磯には古い歴史を持つ漁法や、資源を公平に分けるための慣習が、少しずつ姿を変えながらも連綿として生きてきました。

この作品では次の事項を収録しています。1) 越前町左右の筏を使うワカメ取り、2) 福井市長橋の潜水によるワカメ取りとアマケに乗る女たち、3) 福井市鮎川の海女組合とウニ取り、4) 越廼村居倉のウニ取り 5) 越前町梅浦の男の潜水漁。

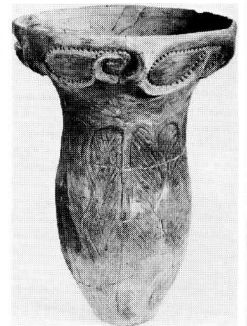
越前海岸には潜水漁が広く分布していますが、女だけが潜る所、男女とも潜る所とさまざまです。それぞれの村の自然や漁への依存度によりこのような違いがでてきたのです。全国でも極めて珍しい左右の筏も同様な背景を持っています。この番組では漁の技術と慣習を取り上げ、漁村の生活の一端を紹介しています。

縄文土器

今からおよそ1万2～3千年前に出現し、世界で最古といわれる縄文土器。これらは狩猟・漁撈・植物採集の生活にあけくれた縄文人に使われたもの。県内でも150余箇所の縄文遺跡から多量に発掘されている。

この番組では、縄文土器づくり(粘土さがしから焼成まで)を実際に行ないどのような工程を経て造られていったかを明らかにする。

また、草創期から晩期まで、約1万年余に及ぶ歳月の中で、環境の変化や生活の進歩とともに、大きく移り変わっていった県内出土縄文土器の生成流転の姿を追う。

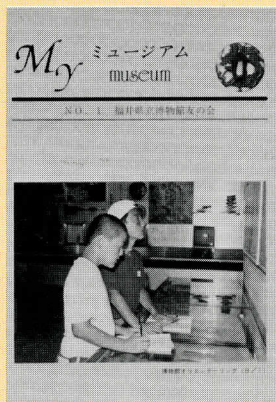


昭和61年度友の会会員募集!

←明日からミュージアム民!

●特典

博物館と友の会の事業が事前に案内されます。
博物館常設展示を何度でも観覧できます。
友の会会誌「My ミュージアム」が送付されます。
博物館広報誌「ふくいミュージアム」が送付されます。



●会費 (年額)

大人 3,000円
大学生・高校生 2,000円
☆ジュニアサークル
中学生・小学生 1,000円

●会員の期間

昭和61年4月1日
～62年3月31日

●入会の方法は

入会申し込み書(博物館にあります)にご記入のうえ、会費は次のいずれかで納入してください。

- 直接博物館内事務局へ納入(申込書を添え)
- 郵便局より振替で郵送(申込書は別に郵送)
- 現金書留で郵送(申込書同封)

★入会の手続きが終了しますと、会員証をお渡します。

●60年度の事業内容

展示説明会 常設展 5回 特別展 4回
学習会 「城下町福井の今昔」
「福井県の化石」
見学会 国立民族学博物館(大阪)
会誌「My ミュージアム」1号、2号の刊行



●61年度の事業計画

学習会(研究発表会) 数回
展示説明会(特別展) 数回
見学会 1～2回
会誌「My ミュージアム」3、4号刊行

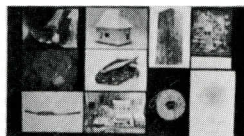
口座振替	
口座番号	金沢 5-23379
口座名称	福井県立博物館友の会

〈印刷物のご案内〉

友の会では、小中学生を対象にして、展示資料の一部をわかりやすく解説した「はくぶつかんミニガイド」と館蔵資料(10点)の絵はがきを発行しました。どちらも博物館受付にて販売しておりますので、どうぞご利用ください。



「はくぶつかんミニガイド」 ¥100
絵はがき 1枚 ¥50
1セット(10枚) ¥500



No.9
ふくいミュージアム 1986. 3. 1

編集 福井県立博物館
発行 福井市大宮2丁目19-15 〒910
☎ 0776-22-4675(代)
印刷 出口印刷株式会社